

直言

いま私の手許には、昭和十九年（一九四四年）に太平洋協会から発行された軍国日本の時代の小冊子類がある。タイトルにも文中にも「世界覇権の争奪」ということが仰々しく並んでいる。私は六月六日

付けのこの欄で、

元来、日本語である「覇権」という

言葉をも沢東が一

九四六年に「世界

覇権」という言葉

で初めて用いていることによつて、一般には中国語としてもなじんでいない「覇権」という用語が、一九七〇年代になると明確な対ソ非難のための政治用語として定着しはじめたことを述べたが、右のような書物を手許

においてこの問題をながめる。いささか感慨深いものがある。このような経緯からしても、中国としては、日本を相手にしてこそ、「覇権」という言葉は条約のなかで用いる先例にしたいのである。

「覇権」で想うこと

「反覇権闘争」というような用語も定着しつつあるが、「反覇権」の国際戦線を形成しようとする中国の執念には並々ならぬものがある。だが、こうした強い意志はあくまでも中国の立場からするものであり、日中ソ

それにしても、「覇権」問題

についての中国の立場は固い。

たしかに、中ソ関係史のいくつ

かの断面を顧み、最近の中ソ関

係を知れば、ソ連に反発する中

国の気持は十分に理解できる。

最近では中国の諸論調のなかに

三角関係のなかに身を置くわが

国の立場とは相容れないのであ

る。中国は一方で互恵平等とか

相互尊重を外交原則として掲げ

ているのに、自己の立場のみを

絶対化して、これに相手を従

わせようとするのは、それこそ

なかじま
中嶋 嶺雄

「中華思想」ではなからうか。

あえて「中華思想」とまでは

いわないにせよ、このような中

国の出方を見ていると、かつて

わが国の平和運動にたいして、

「米帝反対」論や「平和の敵」

論さらには「あらゆる核」に反

対か否かで中国の立場を固執し

たのみならず、それを強引に認

めさせようとした中国のもう一

つの顔が想い出されてならな

い。今年も、まもなく八月六日

が近づいてくるが、最近の「覇

権」問題を契機に、米中接近や

日中国交を採しはらく忘れられ

かけていた中国のもう一つの顔

を想い出すのは私だけであらう

か。

（東京外大助教授）